

Column

琵琶湖講座レポート

アква琵琶では、さまざまな分野の専門家によって琵琶湖に関する研究内容を発表する「琵琶湖講座」を定期的に開催しています。今回は、5月28日に開催した平成20年度第1回の講座についてご紹介します。



演題：「水草群落と琵琶湖の水や水鳥との関係」

「平成20年度 第1回琵琶湖講座」
滋賀県立大学・環境科学部 浜端 悦治 准教授

今講座では、'80年代から始まり、琵琶湖での潜水調査の先駆けとなった水草に関する研究成果が発表されました。まずはじめに、近年、南湖では沈水植物の群落面積が増え、その優占種がクロモヤセンニンモなどの在来種であることが報告されました。とくに南湖では沈水植物群落の回復に伴い、水質の改善が見られたということです。さらに、健全な湖沼生態系の実現には沈水植物群落の回復が不可欠であることから、つづいて水草と他の生物との関係について内容が移りました。水草が生育できる浅水湖沼は、採餌場所としても重要であり、それらを保全、回復することは水草の種子などを運ぶ水鳥を守ることにもつながること、また、それには単独の湖沼ではなく、種を供給し合う湖沼群としての保全の視点、さらには湖沼を結ぶ水鳥と渡りのルート確保が必要であることが述べられました。そして、締めくくりには、生物群が豊富な琵琶湖は、種が絶滅しやすい小湖沼への種の供給源として位置づけ、より一層の多様性の確保に務めなければならないことが多くの参加者に訴えられました。



平成20年度 第1回琵琶湖講座の様子

参加無料

次回「琵琶湖講座」のご案内

8/7木

午後1時30分～3時

平成20年度 第4回「琵琶湖講座」

テーマ：琵琶湖のゆらぎ
講師：水資源機構 関西支社 支社長 原 聡明氏



8/27水

午後1時30分～3時

平成20年度 第5回「琵琶湖講座」

テーマ：迎い来る東南海・南海地震
講師：近畿地方整備局 企画部 防災対策官 中村 文彦氏



場 所：アква琵琶 1階映像ホール

ただ今、事前申し込み受付中!!

詳しくは「水のめぐみ館 アква琵琶」まで。TEL: 077-546-7348

※空席がある場合は当日参加も可能です。

詳しくは「水のめぐみ館 アква琵琶」については、ホームページをご覧ください。

http://www.aquabiwa.jp/

非日常を表現した水没する小間

かつて茶室は「市中の山居」と呼ばれていました。つまり、桃山時代の茶人たちは、神聖で、魔性を帯びたような深い山の空気を都市の中に再現しようとしたのです。それはまた日常の中に非日常に通ずる空間をつくることでもありました。樂吉左衛門さんは、この茶室を建てるにあたって、



茶室(小間)。空間を満たすやわらかな自然光。

まず非日常の空間をどのような所に見出すかを考えました。「当代は、その答えを滋賀という美しく深遠な湖国に求めました。すなわち、非日常の空間を藍色に

「和」を意識した切妻造の屋根とその下に広がる水庭。テラスの外観が自然の中に調和します。



豊かな湖国をイメージした水庭のある風景、佐川美術館



今シーズンのびわす通信は、「知」「食」「見」「楽」の4つの視点から人と水との関わりを見つめ、琵琶湖にまつわる文化や暮らし、歴史について学びます。今号は「見」をテーマに、アква琵琶スタッフ、湖国をイメージする広大な水庭に浮かぶようにたたずむ佐川美術館を訪ね、昨年、あらたに開設された注目の「樂吉左衛門館」を中心にめぐり、光と水が織りなす美の世界に触れます。

見知 楽食



松山早紀子(右)とアква琵琶の木原由美子。

平

成10年、滋賀県守山市の琵琶湖畔に開設した財団法人「佐川美術館」は、日本美術界を代表する日本画家の平山郁夫さんと彫刻家の佐藤忠良さんの作品を集めた美術館です。開館10周年を迎えた昨年は、あらたに「樂吉左衛門館」が完成し、絵画・彫刻・工芸という美術館の3つの柱が完成しました。今回は、企画担当学芸員の松山早紀子さんに館内の見どころをはじめ、水庭の風景や自然光の美しさを採り入れた茶室をご案内いただきます。

和を意識した建築と日本最高峰の作品

美術館の正面ゲートを入ると、満々と水を湛えた水庭と2つの大きな切妻造の屋根が来館者を迎えます。はじめに、佐川美術館開館の経緯を松山さんにうかがいました。

「この美術館は、佐川急便株式会社創業40周年記念事業として創業者の夢でもあった美術館建設の構想を実現したものです。わが国最大の湖、琵琶湖を擁し、古来より優れた風土を誇る近江。さらに、日本人の心の支えでもあった比叡山を望む当地は、めぐまれた自然環境と精神性を象徴する美術館にふさわしい立地でした。」



平山郁夫さんの作品世界をじっくりと堪能できる展示空間。

「当館の特徴はゆったりとした空間で周辺に作品を鑑賞できることです。平山郁夫館では作品の前に置いたベンチに腰を下ろし、心ゆくまで作品の世界を味わっていただけ。また、佐藤忠良館では作品を目で見るだけでなく、原則としてブロンズ像を手で触れて鑑賞していただくことができます。小さなお子さまが見事な彫像に肌の温もりを想像し、さわった瞬間に、冷たい！と大きな声を発して驚くという微笑ましい光景も目にします。」



佐藤忠良さんの代表作「電子・立像」。目と触覚で作者の作意をたしかめることができます。

三大高峰の完結、「樂吉左衛門館」

佐川美術館が絵画、彫刻につづく柱として新設したのが十五代樂吉左衛門の作品の展示館と茶室を合わせた「樂吉左衛門館」です。樂家とは千利休の命を受けて茶碗を焼きはじめた長次郎を初代とし、桃山時代から約400年余りにわたって続く陶工の家系です。樂焼きの技法は、中国から渡来したとされる長次郎の父たちが日本に伝えたものといわれています。吉

広がる湖の水中と考えたのです。水の中は生命誕生の場であり、命の循環を象徴する空間ですが、私たち人間が生存することのできないままに現代の非日常。そこから水底に沈んだ茶室(小間)の創案が生まれました。しかし、ガラスやアクリルを使って水没する茶室を形にすると、ただ驚きを与えるだけの仕掛けにすぎず、非日常に想いを馳せる空間にはなりません。そこで当代が考え出したのは、小間が水中にあることを一条の自然光のみで伝えることでした。

自然の目線と水に浮かぶ広間

小間を出て階段を上ると、一変して光があふれる8畳の広間に出ます。ここは樂吉左衛門館で唯一、地上に設けられた空間です。「畳の高さを限りなく水面に近づけ、水の上に正座するような目線を生むことに当代はこだわりました。太古から私たち人間は自然から身を守り、ともすれば自然を利用することに教習を傾けてきました。



茶室(広間)。水面に正座しているような不思議な感覚が体感できる水に浮かぶ茶室。

松山さんの案内で館内を見学し、光と水という自然がこれほど多くあることを語りかけることを知りました。また、水庭のヨシに飛んでくる野鳥の声を耳に、美術館や茶室という人の手によってつくられたものを通して、自然の偉大さを感じる貴重な体験でした。

【佐川美術館への交通アクセス】

- JR東海道本線(琵琶湖線)守山駅からは近江鉄道バス「佐川美術館行き」佐川美術館前下車 約25分
- JR湖西線野洲駅からは江若交通「免許センター前行き」佐川美術館前下車

【ご利用案内】

開館時間：9時30分～17時(最終入館は16時30分迄)
休館日：毎週月曜日(祝日にある場合はその翌日) 年末年始
入館料：常設展 一般 ¥1,000/高校・大学生 ¥600/小・中学生 ¥300
※お茶室見学は、電話による事前予約制となっております。
詳しくはホームページをご覧ください。http://www.sagawa-artmuseum.or.jp/

財団法人 佐川美術館
〒524-0102 滋賀県守山市水保町北川12891
Phone: 077-585-7800 Fax: 077-585-7810

おたより紹介



●南郷の洗濯は学校で習いましたが、もう一つの呼び名「ひいあ」は初めて知りました。前野さんの写真を一度見たいと願っています。南郷へいくと、この洗濯を必ず眺めて帰ります。なんとなくそほくて、なつかしい思いがします。

石田さん(滋賀県)

青山さん(滋賀県)

松井さん(滋賀県)